

## 「すべての人に扉を開く」

### マタイによる福音書 5 章 9 節

聖学院大学 政治経済学部長 高橋愛子

「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。(マタイ 5:9)」

例年になく厳しい暑さに覆われた夏がようやく去り、聖学院のキャンパスでも新しい学期が始まりました。十分にリフレッシュしてキャンパスに帰ってきた人もいるでしょう。しかし、まだ夏の疲れが抜けないうちま秋学期を迎えた人もいないのでしょうか。年々天候不順になっていく日本ですが、秋から冬に向かうこの季節は、読書の秋でもあり、一番勉強に落ち着いて取り組むことのできる時季ですので、心を落ち着けて、それぞれの勉強に向き合っていく時にしていきたいものです。

今年、聖学院大学は創立 30 周年という節目の年を迎えています。そうしたことから今日の礼拝は、「創立 30 周年を覚えて」というシリーズ礼拝の一つであるということです。そこで、この大学が設立された 30 年ほど前の時代にさかのぼってみることにしたいと思います。

大学がスタートした 1988 年と言えば、日本はいわゆる「バブル」の真っただ中にあり、地価はぐんぐん上がり経済は活況を呈して、人々は気前よく大金を使う、すこし浮かれた時代、ここ数十年のような経済の低迷や格差社会の到来といった時代がやがて訪れるだろうという見通しを持つ人はほとんどいない時代でした。しかしこの「バブル」は 1990 年代初めに突然終り、長期にわたる経済不況が重く社会を覆うことになりました。ここにいる学生の皆さんのほとんどはまだ生まれていない時代ですので、「バブル」時代や「バブル」崩壊後の「失われた 10 年」や「就職氷河期」と言われる暗い時代について、実感が湧かないかもしれません。この大学が誕生してからの 30 年は、日本の社会が大きな変動によって荒波の中に投げ込まれたような歳月だったと言えるでしょう。大学はこうした 30 年を社会の中で共に歩んできたのです。さらに 2001 年には 9.11 同時多発テロがあり、2011 年には 3.11 東日本大震災が起こり、今なお広がる経済格差や過労死などの問題をみると、今も試練が続いていると言えるのかもしれません。

「平和を実現する人々は、さいわいである」という今日選んだ聖句は、「山上の垂訓」と言われるイエス・キリストの説教の中の一節です。マタイ伝第 5 章 3 節から始まる「山上の垂訓」をここで読んでみたいと思います。

「心の貧しい人々は幸いである、天の国はその人たちのものである。

悲しむ人々は幸いである、その人たちは慰められる。

柔和な人々は幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。

義に飢え渴く人々は幸いである、その人たちは満たされる。

憐れみ深い人々は幸いである、その人たちは憐れみを受ける。  
心の清い人々は幸いである、その人たちは神を見る。  
平和を実現する人々は幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」

このようなイエスさまからの福音の呼びかけが語られているのですが、私たちを取り巻く困難な時代の中で「平和を実現する」とはどのようなことを意味するのでしょうか。そのことを今日は考えてみたいと思います。

同じように約 30 年前の出来事として、それまで分厚い「壁」によって分断されていた東西ドイツの「壁」が打ち壊され、あらゆる「自由」が抑圧されていた旧東ドイツの独裁体制から人々が解放されるという出来事が 1989 年の秋に起きました。皆さんもご存じかもしれませんが、「ベルリンの壁」の崩壊という出来事です。そして翌年の 1990 年に 40 年以上分断国家だった東西ドイツは再び一つの国として統一され、今日のドイツの姿となり、やがて EU 創設というヨーロッパ統一の象徴的な存在になってゆくこととなります。

一言で 30 年といっても、歴史を紐解いてゆけば、地球上のさまざまな場所で、固有の課題との格闘の軌跡が見られるのです。

旧東ドイツの都市ライプツィヒの教会、ニコライ教会でも、1989 年の秋、時代との格闘が続いていました。当時、東ドイツは政権党である社会主義統一党 (SED) の支配の下、完全な「監視国家」にあり、政権批判をする人を相互に監視し合うよう巧妙な恐怖政治が行われ、「壁」を越えて西ドイツに逃亡しようとする人は射殺されるという閉ざされた国でした。そうした中で人々は自由を求め、毎週月曜日 17:00 から教会に集まり「平和の祈り」を捧げるようになっていきました。はじめは小さな集団でしたが、やがて、キリスト教徒だけではなく、人権と平等を求めるさまざまなグループが加わり、体制に抵抗する多くの人々が集うようになります。公の場には自由な空間が存在しない中で、毎週月曜日、ニコライ教会には人々が集い討議する。教会はイエスの「山上の垂訓」の精神に基づいて、キリスト者ではない多様な人々を受け入れ、共に討論し、熟考し、祈ったといいます。そしてニコライ教会の庭が違法な場として警察によって包囲され、逮捕者を生み出すようになり、緊張が高まってゆきます。ニコライ教会へ通じる道は警察によって規制され封鎖されます。東ドイツ政府は平和の祈りを中止させるため圧力を強め、数々の逮捕がされるようになり、警察は無抵抗、無防備の人たちを攻撃し、トラックで連行し監禁したのです。

そして 1989 年 10 月 9 日の出来事が起きます。教会では社会主義統一党 (SED) の党員と国家秘密警察 (シュタージ) が大勢押しかけている中で、平和の祈りが捧げられ、非暴力を貫く市民のアピールが読み上げられました。一触即発の緊迫した状況でしたが、しかし他方、当局の指示によって教会に侵入していた国家秘密警察 (シュタージ) や社会主義統一党 (SED) の党員たちはそこで初めて、イエスの福音を耳にする機会を得ていたのです。

その時の様子について、ニコライ教会のフューラー牧師 (C.Führer) はこんなふうに述べています。

「主教の祝福の言葉と印象深い非暴力へのアピールと共にこの平和の祈りは終わろうとしていました。

そして、2000 人を越える人たちが教会をでたとき、——私はこの光景を一生忘れることはないでしょう——広場には数千人の人たちが私たちを待ち構えていたのです。彼らは手に手に蠟燭を持っていました。人は蠟燭を持つとき、両方の手を必要とします。そうして蠟燭の火が消えるのを防がなければならないのです。同時に、これはその手には石も棍棒も持つことができないことを意味しているのです。そして奇跡が起こったのです。非暴力のイエスの精神が多くの人々をとらえ、実質的で平和的な勢力へと展開していき、軍隊、労働者戦闘部隊、警察をも取り込み、彼らを話し合いの中に導き、撤収させたのです。そしてそれは勝者が称賛されることもなければ敗者が面目を失うこともない、いわゆる勝者もなければ敗者もない、イエスの精神の帰結であったのです。そこにはただ寛大な気持ちのみが存在していたのです。非暴力の運動がわずかに数週間続いた後、党の独裁とその支配的な世界観が崩壊していったのです」。

このようにして、「すべての人に扉を開く」(offen für alle)という言葉が、1989 年にニコライ教会で現実の出来事となりました。外国人の排斥を要請する者、野次馬、反政府分子、シュタージ(国家秘密警察)、教会関係者、社会主義統一党(SPD) 党員、キリスト教徒、非キリスト教徒、そのすべてが、十字架にかけられ復活したイエス・キリストの腕の中で一体となった、そうした出来事だったとフューラー牧師は述べています。

約 30 年前の旧東ドイツのように、自由を制限され監視されている独裁国家ではなく、私たちは自由に学び、自由に語り合うことができる社会に生きています。しかし、日本の内外にはさまざまな分断や亀裂が依然として存在しています。皮肉なことに、自由と民主化が実現しているヨーロッパでは、移民排斥という新しい分断がじわじわと広がりつつあります。

「平和を実現する」ということは容易いことではないと思えます。しかし初めは小さな集まりの中で、そしてやがて圧力と緊張の中においても「人々に扉を開く」という営みを重ねていく中で〈歴史の扉〉を開くことを実現したニコライ教会の歩みは、私たちに励ましと示唆を与えてくれているのではないのでしょうか。それでは、お祈りいたします。

在天の私たちの神様、本日、こうして新しい学期の始まる時、聖学院大学の創設から 30 年という歳月に想いを馳せながら礼拝を守るひとときを与えて下さいましたことを感謝致します。イエスさまが祝福の呼びかけをして下さった「山上の垂訓」のみ言葉と精神は、人々の苦悩や分断を癒す力として、「平和をつくり出す」力として今も歴史の中で光を放っていることを教えられました。この大学は、そのようなイエス・キリストの福音という礎(いしずえ)の上に建てられた学び舎です。これからの新しい 30 年も、イエスさまの「山上の垂訓」の精神に固く立ち、「人々に扉を開く」平和の担い手として歩んでいくことができますよう私たちを見守り導いて下さい。

感謝と小さな祈りを、主イエス・キリストの聖名(みな)を通してお捧げいたします。 アーメン

2018 年 10 月 2 日 聖学院大学 全学礼拝シリーズ礼拝「創立 30 周年を覚えて」